



Public Art パブリックアート



六本木ヒルズのパブリックエリアには、森美術館初代館長デヴィッド・エリオット監修による4作品が、またテレビ朝日敷地内には建物の設計を担当した横文彦氏が選定した3作品が設置されています。六本木ヒルズ10周年の2013年には毛利庭園に新たな作品も加わりました。街角の身近な場所で、世界的なアーティストの作品をお楽しみください。

Streetscape ストリートスケープ



ストリートスケープとは、ストリートを構成する家具、装置、備品などから街全体のイメージをつくりだすといった視点から、世界初となる試みです。内田繁がアートディレクションを担当し、世界的に評価が高いデザイナーによるコラボレーションによってつくられています。

六本木ヒルズを東京の文化の中心地にしようというアイデアの一環としてスタートした「六本木ヒルズパブリックアート&デザインプロジェクト」。

世界的アーティストやデザイナーに特別に創作を依頼したもので、敷地内の各所に「文化都心」というテーマに相応しい大規模な計画が街全体に展開されています。

アートとデザインの境界を越えた、美しく、機能的な作品が、創造的な文化都心の景観を形づくっています。

発行: 六本木ヒルズ
 デザイン: 株式会社ウォルナット
 写真: 木奥恵三、株式会社エスエス
 六本木ヒルズ
 2019年8月発行

お問い合わせ: 森美術館
www.mori.art.museum
 TEL.03-6406-6100

Roppongi Hills

Public Art & Design

GUIDE MAP

六本木ヒルズ
 パブリックアート&デザイン
 ガイドマップ

MORI ART MUSEUM
 MORI ARTS CENTER

roppongi hills



A 《ママン》

ルイズ・ブルジョワは、フランス出身で孤高のアーティスト。ブロンズ製の体内に、20個の白く輝く大理石の卵を抱えたこの作品は、自身の母親への憧憬が込められています。六本木ヒルズのメインエントランスでもある66プラザに設置。世界中から人々が集まり、出会い、新たな価値や知恵が生み出され、ママンが抱く卵のように大切に孵化され拡がっていく。この街の象徴として、圧倒的な存在感と優しさを感じさせてくれます。

ルイズ・ブルジョワ
2002年(1999年)/ブロンズ、ステンレス、大理石
9.27 x 8.91 x 10.23(h)m



E 《Kin no Kokoro》

Kin no Kokoroは六本木ヒルズと森美術館の10周年を記念し、毛利庭園の池の中に設置された作品です。周囲を歩くにつれ抽象的なメビウスの輪の形から、大きなハートへと姿を変えていきます。彫刻と水面に映る反射は金色にきらめくオーラとなってハート(作品)の中心に立つ人の上に注ぎ、鑑賞者に作品との対話をうながします。

ジャン=ミシェル・オトニエル
2013年/ブロンズ、金箔、ステンレス鋼
3.3 x 3.6 x 1.69(h)m



F 《守護石》

マーティン・ブリーエは、1989年にサンパウロビエンナーレで大賞を受賞以来、アメリカを代表する彫刻家として知られています。テレビ朝日のアトリウムに向き合うように置かれた作品は、訪れる人々を迎えているかのような存在を示します。中国で切り出された石のプロックを日本の石工によって仕上げ、精密に積み上げられたその姿からは、光と影の移ろいにより、多様な表情が醸し出されます。

マーティン・ブリーエ
2003年/黒御影石(山西黒)
3.7 x 3.0 x 5.5(h)m Commissioned by TV Asahi



B 《薔薇》

ベルリンで活躍するイザ・ゲンツケン、木材やガラス、コンクリートブロックを用い、周囲の空間や環境との関係をテーマにしたミニマルで建築的な彫刻作品を制作しています。地上より一輪の深紅の薔薇が立ち上がるこの彫刻は、ゲンツケンとしては大変珍しい作品で、六本木ヒルズの愛と美を象徴して、66プラザ内ローズガーデンに凛として屹立しています。

イザ・ゲンツケン
2003年(1993年)/スチール、アルミニウム、ラッカー
8.0m(h)
Hollywood Beauty Group



C 《カウンター・ヴォイド》

宮島達男は、1988年に発光ダイオードのデジタルカウンターによる最初の作品を発表して以来、世界的に活動しています。テレビ朝日社屋の交差点コーナーに面する半透明なガラススクリーン(高さ5m、全長50m)には巨大なデジタル数字が6つ浮かび上がり、都会の喧騒の中で規則的に数をカウントする情景は、人々の様々なイメージネーションを呼び起こします。

宮島達男
2003年/ネオン管、ガラス、IC、アルミニウム、電線等
1ユニットの文字:3.2 x 2.2 m x 6文字
Commissioned by TV Asahi Directed by MAKI AND ASSOCIATES



D 《壁画 #948 カラーサークルの織》

ソル・ルウィットは、60年代に始まったコンセプチュアル・アートの第一人者として知られるアメリカの作家です。テレビ朝日社屋のエントランスホールにある壁画は、情報を発信するテレビ局を象徴するものとして、アーティストの原画に従い現場で制作されました。

ソル・ルウィット
2003年/アクリル絵具
1階: 2.7 x 13.4m、2階: 3.0 x 14.8m
Commissioned by TV Asahi



G 《高山流水・立体山水画》

ツァイ・グオチャンは、火薬、風水、漢方薬など中国の伝統的な素材やアイデアを用いた大規模なプロジェクトで知られ、多数の国際展に参加しているアーティストです。今回は、グランドハイアット東京の前に、日本の枯山水の庭園を思い出させる、日本や中国の水墨画に描かれる岩山と水景を立体化しています。岩山の圧倒的な迫力と流れる水の音に触れるこの作品は、空間と人々が気を通わせる壮大で精神的な作品です。

ツァイ・グオチャン(蔡國強)
2003年/石、水 10.1 x 26.8 x 4.0(h)m



H 《ロボロボロボ(ロボロボ園)》

チェ・ジョンファは、身近で日常的なものを題材にカラフルでポップな作品を発表し、韓国で最も注目されるアーティストの一人です。さくら坂公園には、色とりどりに並んだ10台の滑り台をはじめ、あちらこちらに子供のロボットの登場。プリキのおもちゃのようなレトロな趣きをたたえたロボット達には、子供だけでなくかつて子供だった大人への愛に満ちたメッセージが込められています。

チェ・ジョンファ(崔正化)
2003年/FRP、ステンレススチール、ファイバーライト 1.0 x 1.0 x 12.0(h)m



I 《雨に消える椅子》

1967年、日本生まれ。「椅子全体が特殊な技術によって実現した、巨岩のようなガラスの塊でできています。水の中にガラス片を入れた時、その輪郭がだんだんと消えていくように、雨の日にはまるでその姿が消えるかのように見える、「雨の日に消える椅子」がコンセプトです。」

吉岡徳仁
2003年/本体:ガラス、椅子脚部:ステンレス鏡面磨き、床:御影石パーナー仕上、椅子:0.75 x 0.98 x 0.99(h) x 0.41(sh) 塊:0.5 x 0.98 x 0.55(h)m、床:1.68 x 5.95m



J 《愛だけを…》

1943年、日本生まれ。「ジャズの名曲をタイトルに持つベンチは、モノからある種の重力を取り除きたいと考えてデザインした。そして私たちから真の愛を奪ってしまった20世紀社会の規範、思考、感覚、価値観など、私たちの文明的調和を乱してきたすべてのものからの完全なる解放を望んで制作した。」

内田繁
2003年/ステンレス、セラミック塗装
0.45 x 6.0 x 0.95(h)m



K 《デイ・トリッパー》

「《デイ・トリッパー》は、寄りかかたり、座ったり、しゃがんだりなど、日中人々が様々なとるポーズの研究に基づき、7種類のポーズと、テーブルや椅子といった家具が一体となっています。ヨーロッパの尺度と文化を濃縮し強調するため、ピンクの地に、白い花をプリントしベンチの表面を覆っています。」

ドゥルーゲ・デザイン/
ヨルゲン・ペイとクリスチャン・オッパワル&
シルヴァン v.d. ヴェルデン
2003年/ポリウレタン成形FRP、ポリエステル塗装、シルクスクリンプリント
0.75 x 7.0 x 1.41(h)m



L 《パーク・ベンチ》

1959年、イギリス生まれ。「ベンチそのものをデザインコンセプトに、好奇心を持たせるものではなく、環境とのバランスを意図しました。オリジナルのアイデアは、美しく、耐久性のある竹の集成材を使う予定でしたが、時間とともに酸化し、美しく変化する日本の針葉樹を使うことに決めました。」

ジャスパー・モリスン
2003年/脚部・肘:ステンレス、背・座:松
0.44 x 8.58 x 0.75(h)m



M 《アーチ》

1938年、イタリア生まれ。「このベンチは、歩道と車道の間、デザインと建築の間、といった境界に設置されている。それはオープンでもあり、プライベートな空間でもあるでしょう。」

アンドレア・ブランジ
2003年/コンクリート、セラミック塗装
0.5 x 6.0 x 3.0(h)m



N 《波紋》

1941年、日本生まれ。「都市の森に浮かんだ大きな水面であり、その上に広がっていく波紋をイメージしました。この水面に集まった人々によって発生したアクティビティは、水の波紋の広がりのように、相互に干渉し合いながら場を形成していくのです。」

伊東豊雄
2003年/座:クラッド鋼(削り出し加工)、無方向パフ、セラミック塗装、脚部:コンクリート
0.9 x 3.8 x 0.43(h)m



P 《エバークリーン?》

1951年、イスラエル生まれ。「あるものから別のものに境目無く変化しながら、ほとんど無意識のうちに無限大のサインを形作っているのかもしれない。徐々に無限のループは広がっていき、その透き間は地面から伸びるアイビーが絡みながら育っていく骨格を形成します。」

ロン・アラッド
2003年/本体:ブロンズパイプ、脚部:スチールパイプ、ブロンズ板貼
1.48 x 6.04 x 2.71(h)m



Q 《静寂の島》

1917年、オーストリア生まれ。「基本的な考え方は、沢山の人が行き交う街中に遮断されたプライベートな空間を望む人達のものを作ることでした。そのような目的で、小さな建築物に二つの大きなベンチを、歩道側からのみ入れるように設置。車道側からは遮断されています。」

エットーレ・ソットサス
2003年/壁面:特注テラゾー、床・柵:御影石(カルドーゾ)、ベンチ:大理石(ピアノコカラー)
2.3 x 7.0 x 2.1(h)m



Q 《繋留気球》

1961年、スペイン生まれ。枝を広げた木が森のように広がり、強い日差しから親子を守り、この場所であつくりながら時間を過ごせることを願ってデザインされています。木漏れ日が差し込む大きな日傘です。

パトリシア・ウルキオラ
2007年/チタニウム、ステンレス、ゴム



R 《モトクロス》

アメリカ生まれ。坂道の途中に現われる足元にカラフルなストライプが敷かれたベンチは、「はいはい」から「よちよち歩き」まで、いろいろな歩き方にあわせたデザインです。

ジョアンナ・グラウンダー
2007年/FRP、ゴム、人工芝